

目的 衣服の縫製において仕上げの良否は、その仕立てばえに大きく影響するものと考えられる。和服の縫製過程における細部の仕上げには主としてこてが用いられ、その扱いが縫製技術の要因の一つになると思われる。こては、小型、軽量のため安易に扱われることもあり、扱いの未熟さからおこる仕上げのあまさ、布地の損傷等が問題となる。そこでこての温度に関する実態を知り、適正な扱いをするための資料として2, 3の実験を試みた。

方法 ユード付き及び差しこみ式自動電気こてを用い、宝工業、互換式サーミスター温度計により、こての温度、布表面の温度、仕上げの過程における温度の変化等を測定した。試料は綿・絹・毛を用いた。

結果 複数の差しこみ式のこては、差しこむ位置により温度のバラツキがみられた。こては小型ではあるが、アイロンと同じく最高温度は230℃内外に達することもあり、そのままの状態では布に当たった場合、布を損傷することもあり得る。こてを別布に当たった場合、こての温度は静置5秒後で10℃内外の低下がみられ、別布に当たてからの作業の有効性を知り得た。また、布の重ね枚数による布面の温度の低下は、1枚目と2枚目の温度差が15～25℃であり、2枚目と3枚目の差は5～15℃であった。